

医薬品開発の達成感が味わえる業界

CRO新卒採用座談会

新薬の開発成功確率は約3万分の1と、医薬品が世に出てくるまでには長い期間と膨大な人手と費用がかかる。当然、製薬企業だけでは医薬品を開発することが難しくなっており、開発業務受託機関（CRO）のサポートによって支えられているのはご存じだろうか。日本CRO協会が創設されて18年が経過し、協会に加盟する会社は約30社に及ぶ。これら全てのCROには、新薬を開発する喜び、病気で苦しんでいる患者への貢献、グローバルでの活躍機会とやりがい、達成感がたくさん用意されている。また、これまで学んだ薬学知識も十分に生かされる職種だ。今回は日本CRO協会の野又幹雄理事、ベル・メディカルソリューションズの柴田丈志氏、ACRONETの井上一成氏に、CROの事業環境や採用ポイント、入社後の教育体制などを自由に語ってもらった。



採用数20%増の高水準



野又氏

——CROをとりまく環境を教えてください。

野又 会員企業を対象とした調査結果では、2011年度は売上1200億円で前年比5%成長を達成しました。従業員は1万人を超え、臨床開発モニター職（CRA）が約4割、データマネジメント職（DM）が約2割を占めています。12年度は売上1300億円弱と8%成長を見込み、従業員は1万1000人とさらなる拡大が見込まれ、中長期的にも未だ成長の余地は大きいと見ています。CRO各社のこれまでの努力と実績により、クライアントである製薬企業からの信頼を得て、CROは、まさに医薬品の開発において必要不可欠な存在になること

ができたといえるでしょう。

新卒の採用人数に関しては、12年4月入社が382人で前年比22%増加、13年4月には470人、23%増加と高い伸びを示しています。新卒採用が2割増の業界は少なく、極めて成長性の高い業界と考えています。

——CROのやりがい・魅力はどういうところにあるでしょうか。

井上 医薬品が社会で使われるためには、ヒトに投与して薬剤の有効性や安全性を評価する「治験」のもと、そこできちんと薬効や副作用が少ないことが認められなければなりません。製薬企業だけで治験を行うことはかなり減ってきており、私たちCROのサポートがより重要になりつつあります。治験に参加された被験者のデータを収集し、そのデータを解析・評価する業務を通じて、やっと医薬品として承認されるのです。長い年月をかけて医薬品開発の達成感を実感できるのは、CROで働く大きなやりがいの1つと言えます。

さらに医薬品開発は日本国内だけで

日本CRO協会理事

ACRONET

ベル・メディカルソリューションズ

野又 幹雄氏

井上 一成氏

柴田 丈志氏

出席者

はなく、世界をカバーした国際共同治験も増えてきています。CROでも多くの人たちがこの国際共同治験で活躍しています。若い方には、今後も大きな成長機会が用意されているといいでしょう。

柴田 患者さんや社会のために役立ちたいという思いが仕事のモチベーションになります。私たちが頑張ることによって多くの人の命が救われるわけですから。専門性の高い仕事ですので、将来のキャリア形成に向けても武器になります。

野又 医薬品開発の中核となる臨床開発モニター（CRA）を見れば、CROの勢いが見てとれます。モニター総数で見たとき、CROには約4000人が在籍し、製薬企業と同等、もしくはそれ以上の人数となってきています。効率化を進める製薬企業は臨床開

発部門を縮小する一方、CROは拡大傾向にあります。CROが臨床開発職の受け皿になってきているといっても過言ではないでしょう。

また、モニター職をめぐるのは、即戦力としての中途採用も多い業界で、市場価値の高いキャリアを形成する上では、うってつけといえるのではないのでしょうか。

——求める人物像を教えてください。

井上 新薬開発にける情熱を持った方に来ていただきたいと思っています。医師をはじめとする医療従事者を相手に仕事をするわけですから、医学的知識を積極的に学ぶ向上心も必要です。当社でも新卒採用の多くが薬学生ですが、最近では、理系学部全般も対象に幅広い採用を行っています。薬学生の皆さんにとっても、他学部で知識

➤

— より良い薬が患者さんに一日でも早く届くことを目指して —

CROは臨床試験のプロフェッショナルとして、
医薬品・医療機器開発に欠かせない
アウトソーシングパートナーとして、
新薬開発と医療の発展に貢献します。

詳しくはこちらから！

日本CRO協会

検索



www.jcroa.gr.jp

広がる活躍の場 ～日本CRO協会会員総従業員数の推移～

